

木下・大坪遺跡

1983

光洋電子工業株式会社
山梨県大泉村教育委員会

序 文

大泉村は山梨県の北部、八ヶ岳南麓に位置し木ノ下・大坪遺跡は大泉村西井山字木ノ下・大坪の二字にまたがって所在している。

この調査は東京都小平市天神町1～171 光洋電子工業株式会社が本村に企業有地出梨工場建設に当たり敷地造成に伴うところの発掘調査で光洋電子工業株式会社より大泉村教育委員会が業務委託をうけ山梨県文化課のご指導を仰ぎ、国土館大学卒の佐野勝広氏の指導監督で昭和57年4月22日より6月15日まで約60日間に亘り試掘調査面積約40,000m²、本調査面積約12,000m²を実施致しました。その調査結果は、堅穴住居址8軒、掘立柱建物址2棟、溝3本、土壙8基が検出された。本調査地区の周辺にはすでに国指定の金生遺跡や寺所遺跡等縄文時代より平安時代にいたる遺跡が発見されているし、村内には表面調査により数十ヶ所の遺跡があることが判明されているので遺跡の豊庫といってもあえて過言ではありません。

本調査は記録保存として報告書にまとめるとともに出土品等は会社の高配により本村に寄付されており今後関係者による調査研究の資料として学術的、文化的にも非常に貴重であると確信するものであります。本調査に際し多くの方々のご指導、ご援助を戴きましたことに対し心から厚く感謝申し上げます。

昭和58年3月

大泉村教育委員会

教育長 三井甲子雄

例　　言

- 1 本書は、光洋電子工業株式会社山梨工場建設のための造成工事に伴う木ノ下・大坪遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査から報告書作成の費用は光洋電子工業が負った。
- 3 発掘調査は、大泉村教育委員会が主体となって実施し、現場は佐野勝広（国士館大学卒業）が担当した。
- 4 本書の作成のための整理、実測、トレース、図版の作成及び写真撮影、本書の編集は佐野勝広が行なった。
- 5 遺物及び実測図は大泉村教育委員会が保管している。
- 6 発掘調査及び報告書作成にあたっては次の諸先生に御指導、御助言をいただいた。御芳名を記して感謝の意としたい。
末木 健（山梨県教育委員会文化課） 坂本美夫（山梨県埋文センター） 新津 健（山梨県埋文センター） 山路恭之助（須玉町教育委員会） 保坂康大（山梨県埋文センター）

木ノ下・大坪遺跡調査組織

- 1 調査主体者 大泉村教育委員会
- 2 調査担当者 佐野勝広（国士館大学卒業）
- 3 調査参加者 平井仁志 浅川英三 浅川満江 細田朝代 細田みぎわ 浅川久代
二井澄子 浅川けさ子 三井春子 浅川とくえ 細田茂登枝 浅川照子
浅川つた子 浅川もとじ 浅川輝枝 山口淑江 小池みどり 藤森房子
- 4 調査協力者 伊藤正幸（国学院大学）
- 5 事務局 大泉村教育委員会（教育長 三井甲子雄）係長 山田初雄

目 次

序 文

例 言

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査に至る経緯と調査経過	2
III	遺 構	4
1	住 居 址	4
2	掘立柱建物址	10
3	溝 状 遺 構	12
4	土 墓	14
IV	遺 物	14
1	住居址出土遺物	14
2	掘立柱建物址出土遺物	20
3	土 墓 出 土 遺 物	21
V	結 語	22
	住居址について	22
	出土土器	22
	編年的位置	23

お わ り に

挿 図 目 次

第1図	木ノ下・大坪遺跡位置図	1
第2図	遺跡付近の地形と発掘区	2
第3図	遺構配図	3
第4図	第1号住居址実測図	4
第5図	第2号住居址実測図	5
第6図	第3号住居址実測図	5
第7図	第4号住居址実測図	6
第8図	第5号住居址実測図	7
第9図	第6、7、8号住居址実測図	8
第10図	第1号住居址カマド実測図	9
第11図	第2号住居址カマド実測図	9
第12図	第3号住居址カマド実測図	10
第13図	第8号住居址カマド実測図	10
第14図	第1号掘立柱建物址実測図	11
第15図	第2号掘立柱建物址実測図	12
第16図	溝状遺構実測図	13
第17図	土壤実測図	15
第18図	第1号住居址出土遺物	17
第19図	第2、第3、第4号住居址出土遺物	19
第20図	第6、8号住居址、第2掘立柱建物址、第2号土壤出土遺物	21

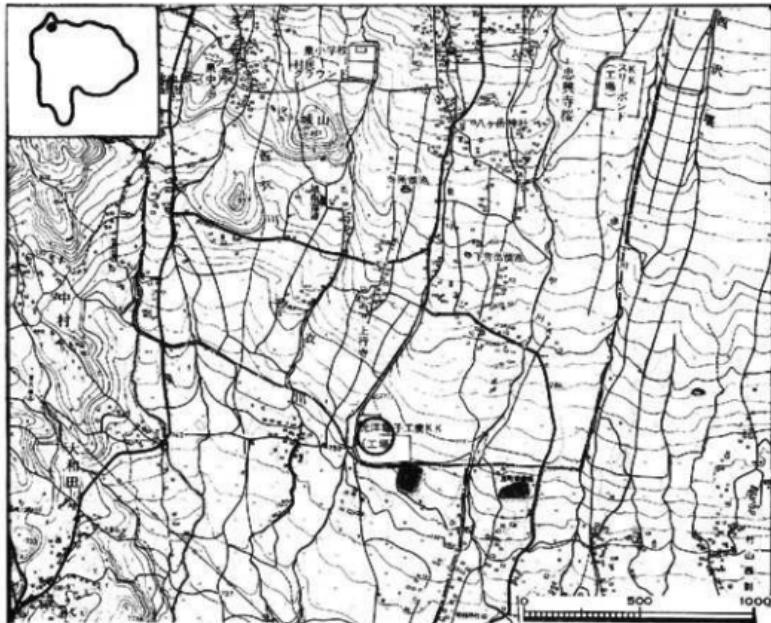
図版目次

- 図版1 遺跡より八ヶ岳を望む 遺跡近景（西より） 遺跡近景（東より）
- 図版2 遺跡東側 遺跡南側 調査風景
- 図版3 第1号住居址
- 図版4 第第1号住居址カマド 第1号住居址遺物出土状態
- 図版5 第2号住居址
- 図版6 第2号住居址カマド
- 図版7 第3号住居址 第3号住居址カマド
- 図版8 第4号住居址 第5号住居址
- 図版9 第6、7、8号住居址 第1号掘立柱建物址 第2号掘立柱建物址
- 図版10 第1号溝状遺構 第2号溝状遺構 第3号溝状遺構
- 図版11 第3号溝状遺構
- 図版12 第1～3号土壤 第1号土壤 第2号土壤
- 図版13 第1号住居址出土遺物
- 図版14 第1、2号住居址出土遺物
- 図版15 第3、4、5、8号住居址出土遺物
- 図版16 第2号掘立柱建物址、第2号土壤出土遺物

I 遺跡の位置と環境

大泉村は山梨県の北端に位置し、南は長坂町、東は高根町に隣接している。大泉村は八ヶ岳の南麓、赤岳の南斜面に占地している。標高1000m付近までは、急傾斜で所々に巨岩がみられる。南側に下るにしたがい小河川に開拓された細い谷や尾根となり、谷は現在水田となっている。木ノ下・大坪遺跡は大泉村の南端で長坂町との境に位置し、大泉村西井出字木ノ下・大坪に所在する。遺跡の標高は約750mで、北より南に向かう緩傾斜地である。

県北部の大泉村付近には縄文時代から歴史時代までの遺跡が多数みられる。特に知られた遺跡は縄文時代の著名な遺跡が多い。木ノ下・大坪遺跡と同時代の平安時代の遺跡で発掘調査が実施された遺跡には、寺所遺跡・城下遺跡・原田遺跡・東原遺跡があり、寺所遺跡では多くの墨書き土器、城下・原田遺跡からは出土例の少ない石鈴が出土し、東原遺跡では小鎧治遺構が検出され、各々特色をもった遺跡である。またこの地域周辺は中世において逸見庄と呼ばれる長野県の佐久や諏訪地域との交通上の拠点の一つとして重要な地であった。



第1図 木下・大坪遺跡位置図 ○印

II 調査に至る経緯と調査経過

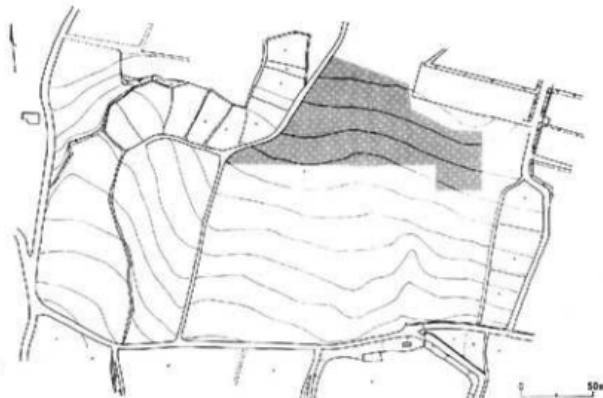
昭和57年度に北巨摩郡大泉村西井出字木ノ下・大坪の地域内に東京都小平市に本社をもつ光洋電子工業が山梨工場の建設を計画していたが、昭和56年度の山梨県教育委員会文化課の遺跡分布調査により、この工場用地内に遺物の散布が認められ遺跡の可能性が大であることから、文化課、大泉村教育委員会、光洋電子工業の三者で協議が行なわれ、検討した結果、遺跡の有無と範囲を確認するために、試掘調査を実施することになり、光洋電子工業の委託を受けて大泉村教育委員会が昭和57年4月22日から5月1日まで実施した。試掘調査により平安時代の堅穴住居址2軒、掘立柱建物址1棟、溝状遺構1本と縄文時代の土壙2基が検出され、須恵器、土師器等の土器類が出土した。その結果、本調査の必要性が認められたために遺構の検出された北側用地約1,200m²を対象とし、昭和57年5月10日から6月15日まで本調査を実施した。調査方法は、調査対象地内の表土を重機により排土した後、工場建設用の基本杭を基準にし、調査区全域に10m四方の方眼を組み、北から南をA～I、西から東を1～14と呼称し、遺構、遺物の出土地を区分した。発掘調査は5月10日から開始した。先ず試掘調査によって検出された遺構を中心に入力によって掘削を行なった。5月17日より遺構の掘り下げに入った。調査の期間中は晴天が続いたため調査は順調に進んだ。6月14日をもって実測、写真撮影等の作業が終え、木ノ下・大坪遺跡の発掘調査が終了した。調査の結果、堅穴住居址8軒、掘立柱建物址2棟、溝状遺構3本、土壙8基等が検出された。本遺跡における基本的な層位は次の通りである。

第Ⅰ層 表土（耕作土）

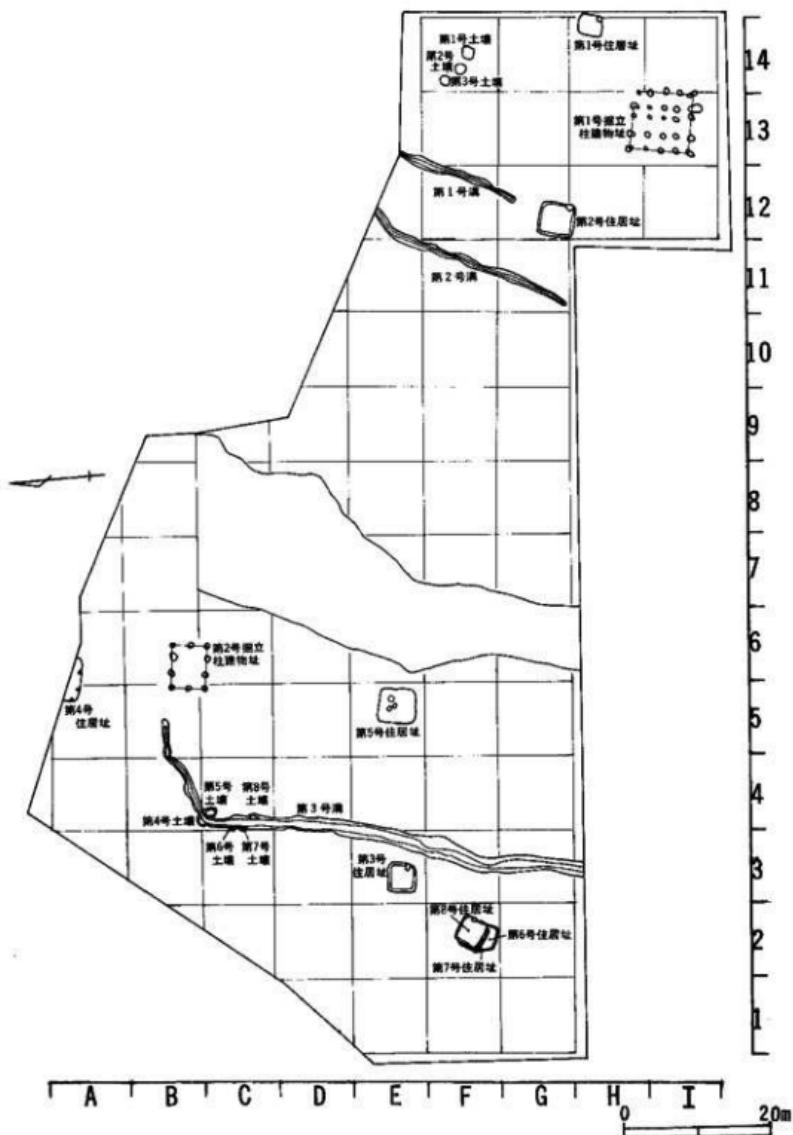
第Ⅱ層 床土（水田の床土）（黄褐色土で鉄分を多く含む。）

第Ⅲ層 黒褐色土（粘性に富む、遺物包含層である）

第Ⅳ層 ローム



第2図
遺跡付近の地形
と発掘区



第3図 造構配置図

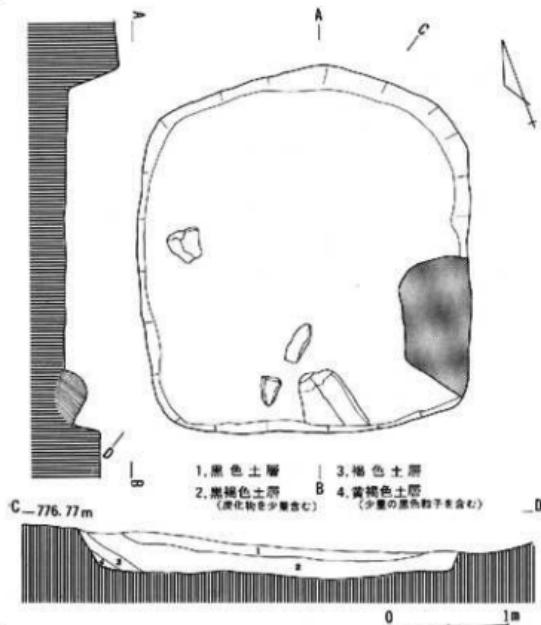
III 遺構

1 住居址

第1号住居址

(第4図)

本住居址は遺跡の東端に位置する。プランは東西2.5m、南北3mの北壁に膨らみのある隅丸方形を呈す。主軸方向N-124°-Eである。床面はロームを固めた床で、北壁付近が軟弱。柱穴・周溝共に認められない。壁は全体にやや傾斜をもち、壁高は20cmから30cmを測る。カマドは石組カマドであったと推定され、東壁の南に設けられてい



第4図 第1号住居址実測図

る。全長55cm、幅110cmである。天井部は崩壊し、焚口部付近で天井部に使用されたと思われる平石が2~3個みられた。袖に25cm前後の石を2個使用している。火床は梢円形を呈し、壁への掘り込みは認められない。遺物は住居址の中央部、カマド付近に集中して出土した。

第2号住居址(第5図)

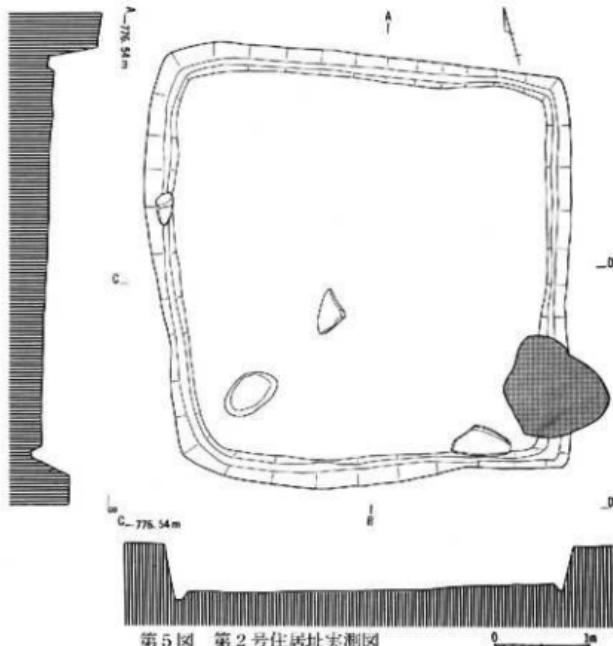
本住居址は第1号住居址の西約24mの地点に位置する。プランは東西4.5m、南北4mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-110°-Eである。床はロームを掘り込み固めていて、全体に良好であった。ピットが南壁の西寄り付近に検出されたが、非常に浅い。本住居址に伴う柱穴かどうか不明。壁は外側に若干傾斜をもって立ち上がり、壁の現在高は確認面より35~50cmを測る。周溝は壁の直下にあり、幅5~10cm、床面からの深さ約10cmである。又カマド部分を除いて存在し断面はU字状を呈している。カマドは東壁の南コーナーに構築され遺存状態の良好な石組カマドであった。袖と天井に約30個の石を用いている。壁外に35cm程度掘り込んで、規模は全長約1.6m、幅約55cmである。焚口部と燃焼部は明確に分離している。本住居址の遺物はすべて覆土中から出土した。

第3号

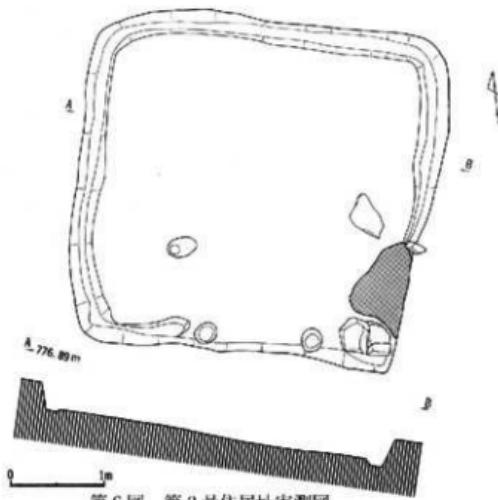
住居址

(第6図)

本住居址は第3号溝の西約2m、第6、7、8号住居址の東約8mの地点に位置する。プランは東西3.8m、南北3.5mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-104°-Eである。床は比較的平坦でロームを非常によく踏み固めており中央部で特に固い。柱穴は3ヶ所に認められ、径6~11cm、深さは床面より15~20cmを測り、平面形は3個共に円形を呈する。周溝はカマド付近、南壁中央を除き認められ、幅6~11cm、深さは床面より10cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は確認面で30~40cmを測り床に続く。カマドは東壁の南隅に設置され、全長約60cm、幅55cmで天井部は崩れているが、袖石は原位



第5図 第2号住居址実測図



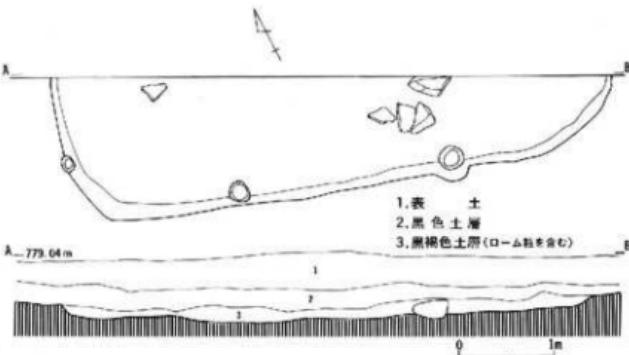
第6図 第3号住居址実測図

置を保っていた。本カマドは石と粘土により構築されている。遺物はほとんど破片であり、すべて覆土中から出土している。

第4号

住居址(第7図)

本住居址は第2号掘立柱建物址の南約1.2mの地点に位置する。住居址の北側は調査区域外にあり完全掘り出しができなかった。プランは東西5.7m、



第7図 第4号住居址実測図

南北は不明であるが隅丸方形を呈する住居址と思われる。床は平坦であるが全体に軟弱である。柱穴は南壁側に2個、西壁側に1個検出され、径20~30cm、深さは床面より15~35cmを測る。周溝は検出されなかった。壁の遺存状態は悪く、壁高は確認面より5~15cm程度である。カマドは調査範囲には検出されなかった。遺物は須恵器壺の破片1点が西壁付近の床直上より出土している。

第5号住居址(第8図)

本住居址は第3号溝の東約14mの地点に位置する。プランは東西4.6m、南北4.8mの隅丸方形を呈する。床はローム面をもって床とし、貼床は認められない。比較的平坦であるが非常に軟弱である。住居址の中央北に2個のピットが検出されたが、深さは浅く柱穴とは考えられない。径は65~90cm、深さは床面より15~20cmを測る。周溝、カマド共に確認できなかった。出土遺物は1点も出土していない。本住居址は他の住居址とは内容を異にすると考えられる。類例は、埼玉県の田中前遺跡、千葉県の山田水呑遺跡にみられ、2例共にカマド、周溝はなく床面は軟弱で、出土遺物は非常に少ない等の共通点が多い。遺物は1点も出土しなかった。

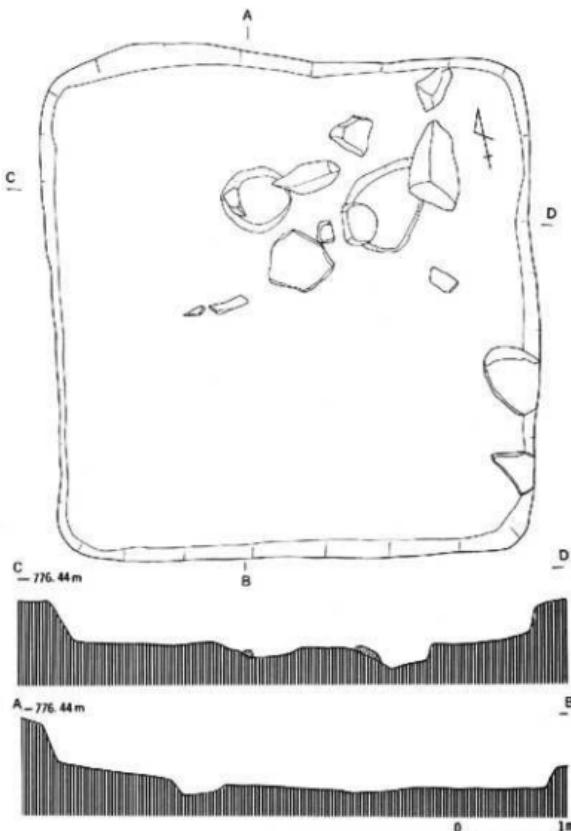
第6号住居址(第9図)

第3号住居址の南約8mの地点に位置している。本住居址は第7、8号住居址に切られて存在し、重複関係の3軒の住居址中構築された時期が最も古い。プランは東西3.5mを測る隅丸方形を呈すると思われる。床はロームを固めた床で、遺存状態は良好である。柱穴は認められ

ない。壁の遺存は悪く、壁高は確認面より5~15cmを測る。周溝は東、西、南壁下に認められる。幅5~7cm、深さは床面より5cmである。カマドは検出されなかった。遺物は東壁付近の床直上より出土した。

第7号住居址 (第9図)

第6号住居址の北側を切り込んで構築し、第8号住居址により大部分を切られて存在する。したがって構築された時期は第6号住居址よりも新しく第8号住居址よりも古くなる。プランは残存する壁より東西3.3m、南北3mの隅丸方形である。床は平坦であるが軟弱を呈する。壁は非常に遺存が悪く、壁高は2~15cmである。周溝は幅5~10cm、深さは床面より5cmを測り断面形はU字状を呈する。カマド、柱穴は確認できなかった。遺物は出土していない。



第8図 第5号住居址実測図

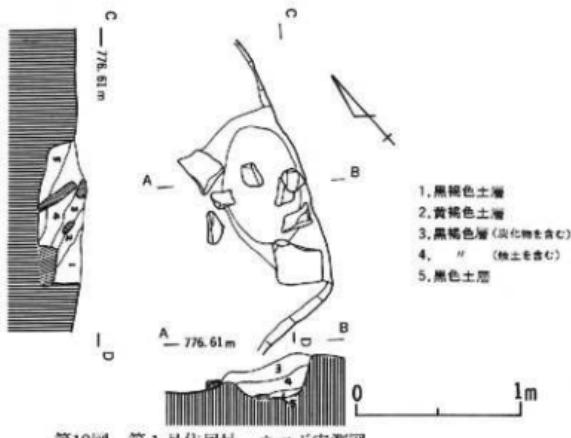
第8号住居址(第9図)

本住居址は第7号住居址の大部分の切り込んで構築されている。重複住居址3軒の中で最も新しい住居址である。プランは東西3.4m、南北3.2mを隅丸方形を呈する。主軸方向はN-18°-Eである。床はローム若干掘り込み、踏み固められて良好な状態を呈している。柱穴は認められない。壁は外に傾斜をもって立ち上がる。壁高は5~50cmで北壁に比べて、南壁は遺存状態が悪い。周溝は南壁と西壁の一方を除いて認められた。幅6~10cm、深さは床面より10

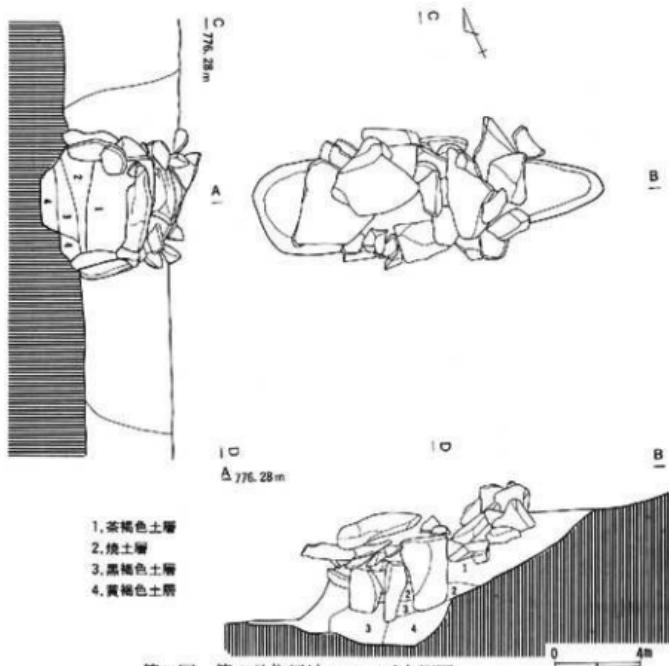
cmを測る。カマドは全長90cm、幅65cmで、右袖を15cm前後の石で、左袖を白色粘土とロームを用いて構築している。天井部は崩れ、遺存状態は全体に悪い。遺物は土器類が覆土より出土し、刀子が住居址中央部の床直上より出土した。



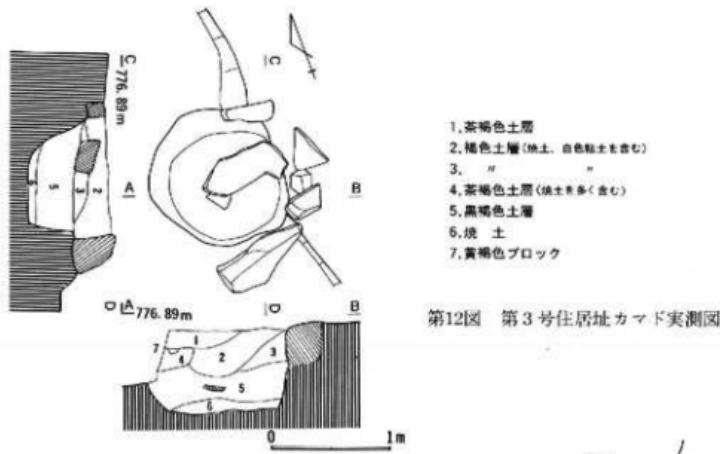
第9図 第6、7、8号住居址実測図



第10図 第1号住居址 カマド実測図



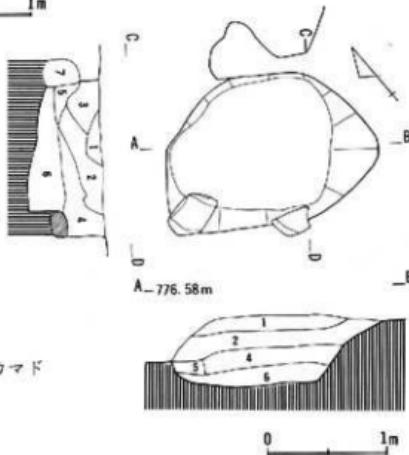
第11図 第2号住居址 カマド実測図



第12図 第3号住居址カマド実測図

- 茶褐色土層(黒色ブロックを若干含む)
- 黄褐色土層(ローム粒子及び黑色ブロックを含む)
- 黒褐色土層(ローム粒子を含む)
- 黄褐色土層(ロームブロックを含む)
- 茶褐色土層
- 焼土
- 白色粘土

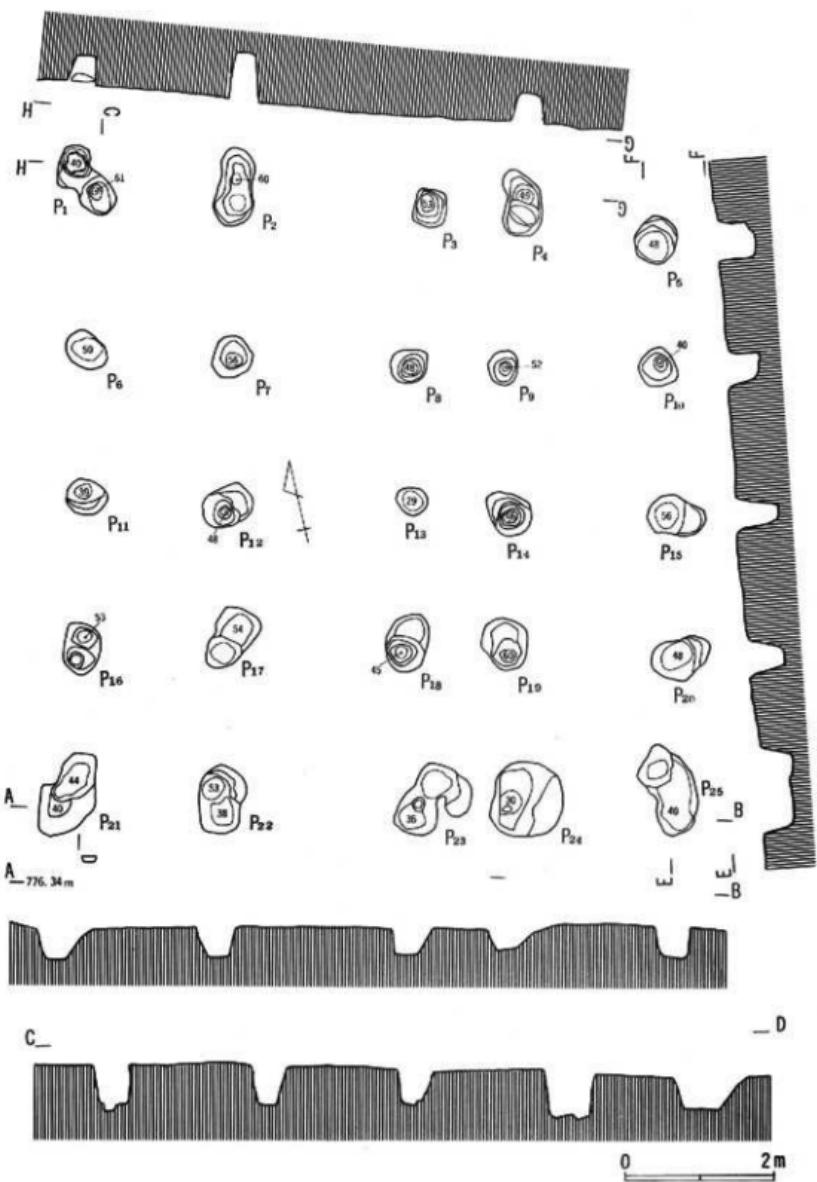
第13図 第8号住居址カマド



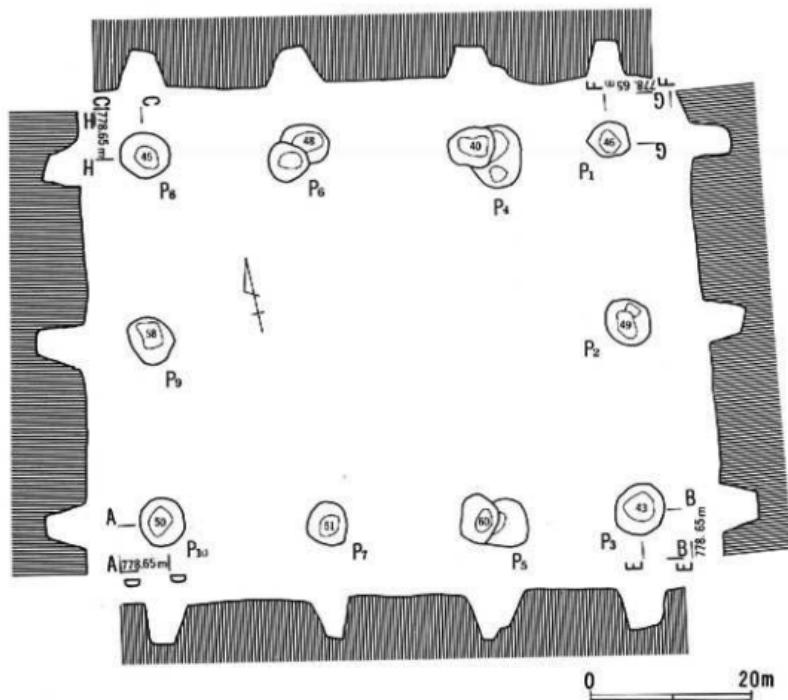
2 挖立柱建物址

第1号掘立柱建物址（第14図）

第1号住居址の南約9m、第2号住居址の南東約10mに位置する4間（約8m）×4間（約7.5m）の掘立柱建物址である。主軸方向はN-105°-Eを呈する。柱間寸法は、梁行約2m、桁行は1～3mであり、中央よりやや東側によって東柱（P1a）が検出された。柱穴は径40～70cm、深さは確認から20～61cmを測る。柱穴の掘り方は円形及び梢円形を呈するがややひずんだ形態をもつ柱穴が多い。北と南の柱穴列に建て替えが認められる。覆土は黒色土と黒褐色土で、柱痕は確認できなかった。



第14図 第1号据立柱建物址実測図



第15図 第2号掘立柱建物址実測図

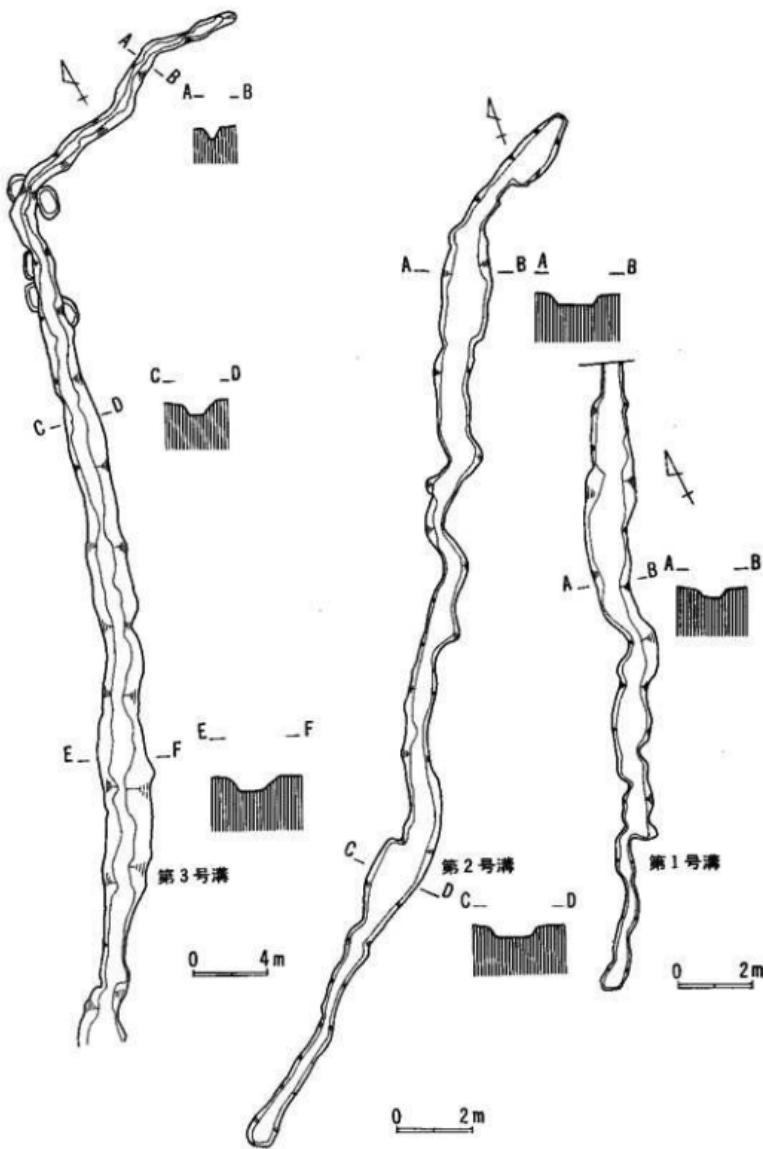
第2号掘立柱建物址（第15図）

第4号住居址の南約12mに位置する2間（4.6m）×3間（6m）の掘立柱建物址である。主軸方向はN-101°-Eを向いている。柱間寸法は深行2.3m、桁行2mである。柱穴は径20～58cm、深さは確認面から38～60cmを測り円形を呈する。

3 溝 状 遺 構

第1号溝状遺構（第16図）

第2号住居址の北に位置し、北から南に流れをもつ溝である。幅40cm～1.3m、深さは確認面から20～30cm前後で、溝の底には砂層がみられ、断面はU字状を呈している。出土遺物はなく性格及び所産時期は不明。



第16図 第1、2、3号溝状遺構実測図

第2号溝状遺構（第16図）

第1号溝状遺構の西約10mに位置し、第1号溝状遺構と平行して走る溝である。幅50cm～1m、深さは確認面より30～40cmを測る。出土遺物はなく、本溝の性格と所産時期は不明。

第3号溝状遺構（第16図）

遺跡の西に位置し、北から南へ流れをもつ溝である。幅は南に下るにしたがって広くなり最大幅2.25m、最小幅50cmを測る。断面はU字状か台形状を呈する。出土遺物は、上師器、須恵器、灰釉陶器の細片が少量出土した。細片のため実測図示は不可能であった。性格は不明であるが、平安時代の所産と思われる。

4 土 塚

第1号土塚（第17図）

径1.4～1.5m、深さは確認面より50cmを測り、平面形は円形を呈する。出土遺物はない。

第2号土塚（第17図）

径1.2～1.4m、深さは確認面より35cmを測り、平面形は不整円形の土塚である。出土遺物は覆土中より縄文時代前期の上器片が出土した。

第3号土塚（第17図）

径1.1～1.35m、深さは確認面より20cmを測り、平面形は不整の橢円形を呈する。断面はほぼ皿状にちかい。本土塚からは遺物は出土しなかった。

第4号～第8号土塚（第17図）

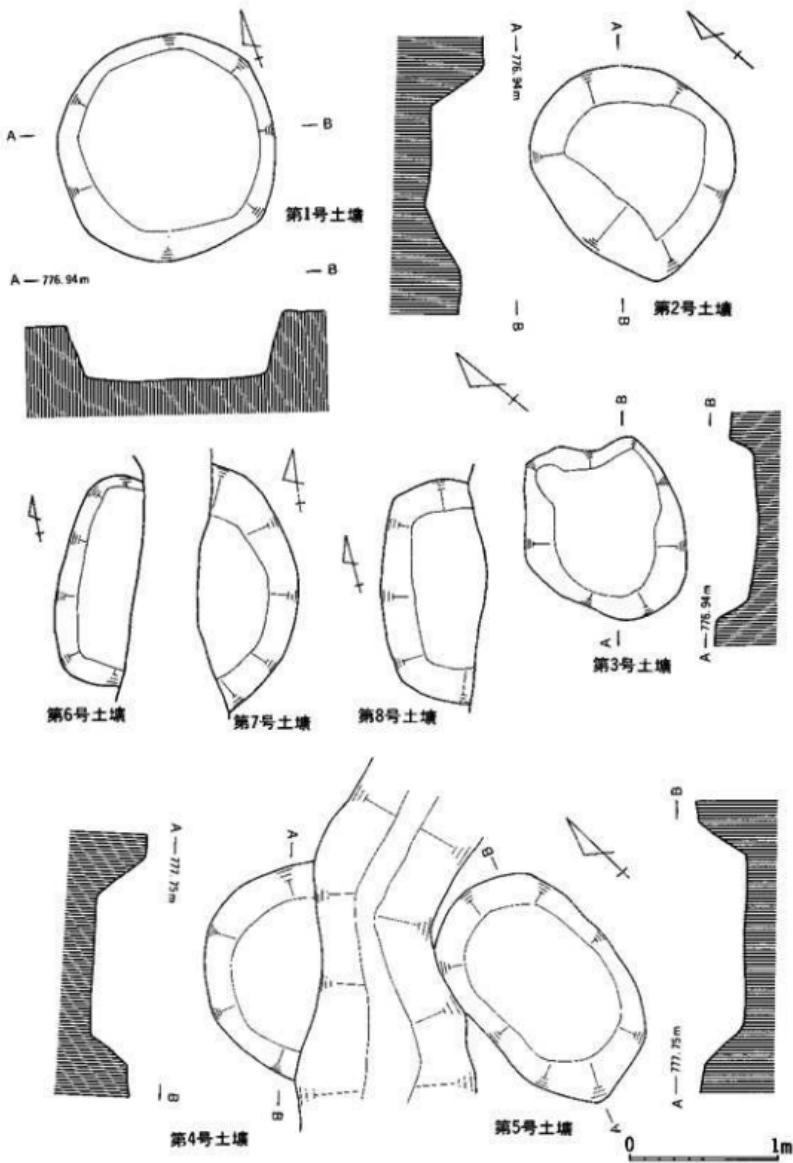
第4号土塚～第8号土塚はすくなくからず第3号溝によって切られている。径1.3～1.6m、深さは確認面より25～35cmを測り、平面形は円形と隅丸長方形を呈する。5基の土塚内部からは遺物は出土していない。そのための性格は不明である。

IV 遺 物

(1) 住居址出土遺物

第1号住居址出土遺物（第18図）

遺物の総数約30点を数えるが、実測可能なものは16点であった。



第17図 土壌断面図

土師器坏形土器（1～5, 7～14）

1、2、5は体部下半を斜方向の箇ケズリし、底部は全面手持ち箇ケズリを施している。1は口唇部が丸く、2は玉縁化を呈し、外反する。色調は1、2、5共に赤褐色で、胎上釉であり焼成良好である。3と4は、内外面共にロクロ整形を施して、口唇部は玉縁を呈し、3は外反し、4はやや内反する。底部は回転糸切り未調整である。7、8は内面黒色処理の坏で、内面に横と縦の箇磨きが施され、外面はロクロ整形がなされている。口唇部は尖り、やや外反する。底部は回転糸切り未調整である。色調は外面暗褐色を呈する。9、10は口縁部内面に段のある坏で、内反し、内外面共にロクロ整形により仕上げられ、底部は回転糸切り未調整で二次整形痕はない。色調は茶褐色を呈する。9の体部中央に「庄」の墨書きがみられる。11～13は器壁の厚い底部よりやや外反気味に立ち上がり、口唇部で若干外反する。口唇部は丸味をもつ。11の底部は回転糸切り未調整であり、12の底部は全面手持ち箇ケズリされる。色調は赤褐色を呈し内面には油煙を残している。14は内面黒色処理の高台付の坏で高台底面は平である。底部は回転糸切り未調整。黒色処理の内面には横、縦の箇磨きが施されている。

土師器皿形土器（6）

6は身が非常に浅く、皿といえる。口縁は大きく開き、丸曲し外反する。色調は赤褐色を呈し胎上は小砂粒を含み焼成良好。

土師器壺形土器（15）

堀の口縁部破片である。口縁部は厚く外反している。外面は縦のハケ目、内面は横のハケ目整形が施される。

須恵器壺形土器（16）

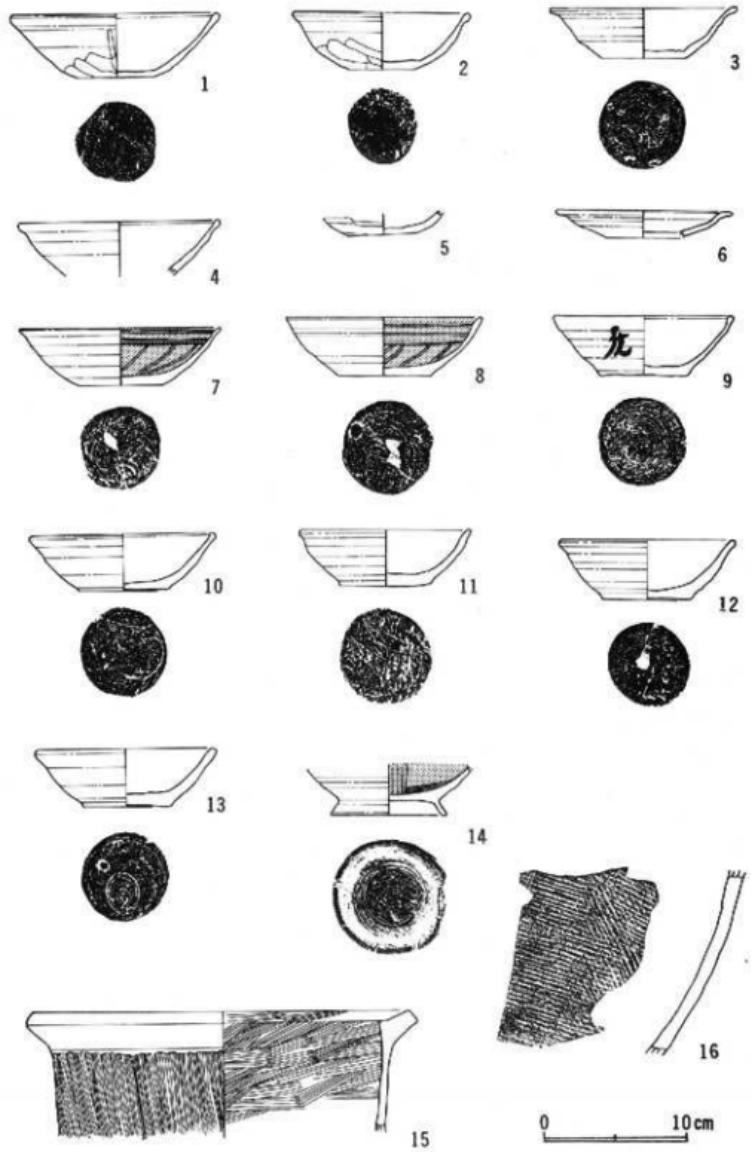
須恵器壺形土器の胴部破片である。外面に平行の叩き文が残るが内面は平滑、色調は灰青色を呈する。

第2号住居址出土遺物（第20図）

出土遺物は総数100余点を数えたが、実測図示できたのはわずか12点のみであった。

土師器坏形土器（1～9）

1は体部下半に斜方向の箇ケズリを施し、内面ロクロ整形、口唇部は玉縁で外反する。色調は赤褐色を呈する。2は口唇部に丸味をもたらすように開くように立ち上がりやや外反する。体部下半に斜方向の箇ケズリがみられる。3は口唇部が尖り外反する。内外面共にロクロ整形である。底部は全面手持ち箇ケズリされている。4は口唇部までは均一である。内外面共にロクロ整形を施す。底部は回転糸切り未調整である。体部中央に「處」と読める墨書きがみられる。6は内外面共にロクロ整形がみられ、底部は回転糸切り未調整で二次的整形は認められない。7、8は内面黒色処理の坏で、7は厚い底部からゆるやかに内彌して立ち上がる体部は口縁部で薄



第18図 第1号住居址出土遺物実測図

くなり口唇部に向かう。体部中央に「感」の墨書きがみられる。4の墨書きとは字体が異なっている。8、底部は回転糸切り未調査で、外面の色調は赤褐色を呈する。9は外面に鋭い凹線状の縦がついている。

砥石（10）

凝灰岩製で縦4cm、横3cm、厚さ10~20cmを計測する。1面だけに使用痕が認められる。携帯用の砥石である。

土師器壺形土器（11~12）

11は小形の壺で内外面ハケ目整形があり、口縁部はくの字状を呈する。口は底部に木葉痕の残る壺で、ハケ目のきれる箇所に指頭の圧痕がみられる。

第3号住居址出土遺物（第19図）

出土遺物は総数10点で、ほとんど破片であり、10点のうち実測図示できたものは2点であった。

灰釉陶器（13、14）

13は灰釉陶器の高台付杯である。高台からゆるやかに内側に内巻し立ち上がる。口縁部はやや外反し、口唇部に丸味をもつ。底部は回転糸切り未調整。内面には重ね焼きの痕が残り、全体に丁寧ななで付の作りである。胎土は灰白色、口径14cm、器高7cm、底径9cm。14は灰釉陶器の皿である。器壁は底部から体部まで一定の曲線で、口縁部にいたりやや薄くなり外反する。胎土は灰白を呈する。

土師器壺形土器（15）

15は土師器壺形上器の胴部破片である。外面に縦のハケ目整形が施され、器壁は3~4mmを呈する。色調は茶褐色。

第4号住居址出土遺物（第19図）

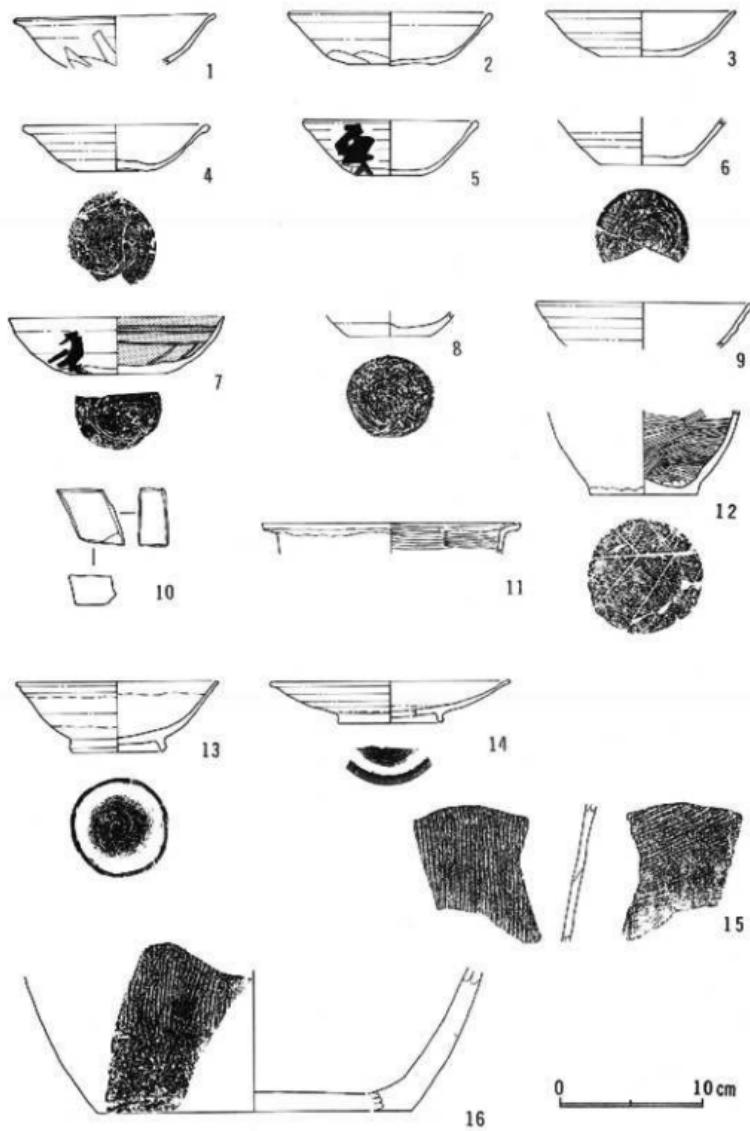
第4号住居址から出土した遺物は須恵器壺の破片1点であった。

須恵器壺形土器（16）

16は須恵器壺の底部破片で、外面に叩き目が良く残っており、その上から二次的な整形で体部下半を籠ヶ目している。色調は灰青色を呈する。

第6号住居址出土遺物（第20図）

出土遺物は総数約20点で、その内訳は須恵器壺の破片2点と他に土師器18点であった。20点のうち実測図示できたものは5点である。



第19図 第2号(1~12)、第3号(13~15)、第4号(16) 住居址出土遺物実測図

須恵器環形土器（1～2）

器壁は底部で厚く、体部下半から口縁部にかけてはほぼ一定している。口唇部は尖り、外反する。底部は回転糸切り未調整である。1、口径12cm、器高4cm、底径6cm、2、底径6cm、色調は灰青色を呈している。

土師器環形土器（3～4）

3、4は、内面に暗文を施し、3は外面にロクロ整形され、4は体部下半に斜方向の範ケズリがみられる。4の底部は中央にわずかに糸切り痕を残しているが周辺は範ケズリによって底を平坦にしている。色調は3、4共に赤褐色を呈し、胎土中に赤色粒子を含んでいる。

土師器壺形土器（5）

5、口縁部は非常に強く「く」の字状に外傾している。外面に縱方向、内面を横方向のハケ目整形が施され、口縁部内面と口縁部外面には横ナデが見られる。

第8号住居址出土遺物（第20図）

出土遺物の総数は35点であり、実測可能なものは4点であった。その内訳は須恵器環形土器1点、土師器環形土器2点、そして刀子1点である。

須恵器環形土器（6）

6は口縁部のみの破片で、ゆるやかに内側して立ち上がり口縁部で外反する。内外共にロクロ整形、色調は灰青色を呈し、一部に火だしきを残す。口径12cm。

土師器環形土器（7、8）

7、8は内外面共にロクロ整形を施して、7の口唇部は玉縁を呈している。色調は赤褐色を呈するが焼成は良くない。

刀子（9）

茎と刃の一部が残る刀子で、茎の一部に木質が残り、背側と刃部側に段をもって闊が形成される。刃部残存の長さ6cm、茎部残存の長さ2cm。

第2号掘立柱建物址出土遺物（第20図）

遺物はP₉より灰釉長頸壺の頸部の破片と須恵器甕の破片が出土した。

灰釉長頸壺（10）

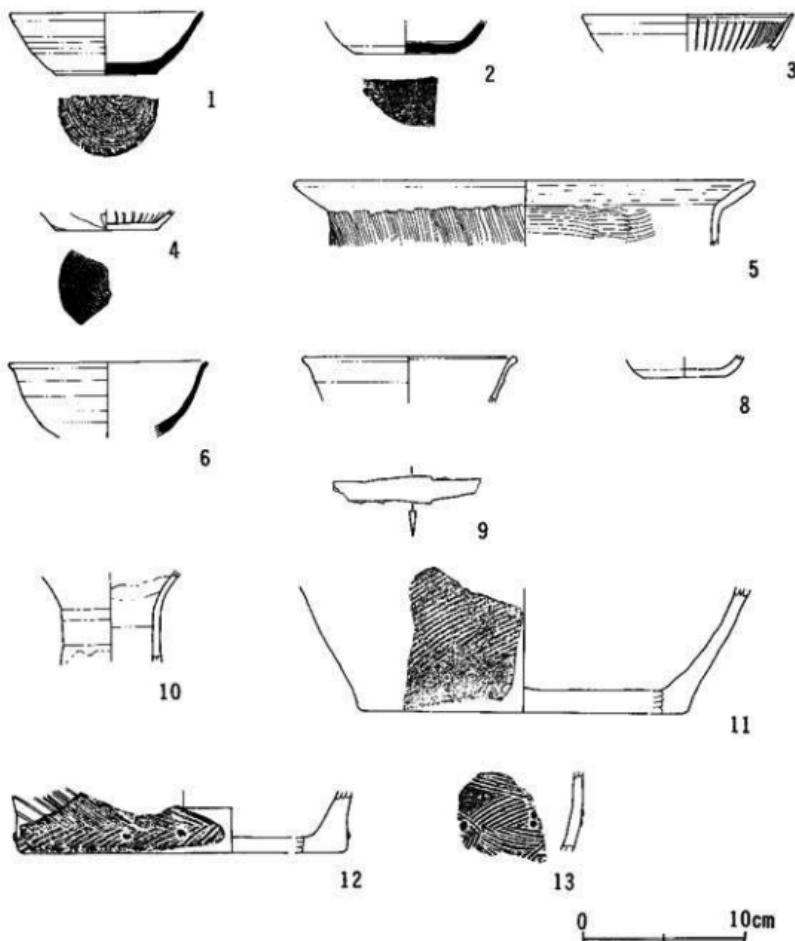
10は灰釉長頸壺の頸部と考えられる。色調は灰白色を呈する。

須恵器壺形土器（11）

11は須恵器壺形土器の底部から胴部にかけての破片である。外面には斜方向の叩き文が残る。内面は指頭による整形痕がのこり、凹凸が激しい。色調灰青色。

第2号土壤(20図、12、13)

12と13は縄文時代前期の土器片である。半截竹管による文様が施され、ボタン状の貼付文がみられる。色調は赤褐色にちかい。本土器片は諸磯C式に比定できよう。



第20図 第6号(1~5)、第8号住居址(6~9)、第2号掘立柱建物址(10、11)
第2号土壤出土遺物(12、13)実測図

V 結語

木ノ下・大坪遺跡の調査の結果、堅穴住居址8軒、掘立柱建物址2棟、溝状遺構、土塹8基、が検出された。ここでは検出した堅穴住居址と土器（特に出土点数の多い土師器環形土器と須恵器環形土器）について、若干の検討をし結語としたい。

住居址について

住居址の形態は、検出された8軒の住居址すべてが隅丸方形を呈する。規模は1辺3~5m前後を基本として、最大規模は、5号住居址の4.6m×4.8mである。カマドの位置は、カマドの検出した住居址、第1、2、3、8号住居址共に、東壁に設けられ、東壁の南側に寄るという規則性が見られる。この規則性は、ハケ岳から吹きおろす、通称ハケ岳おろしと呼ばれている北風の影響と思われる。カマドの構造は、大半の住居址で、壁への盛り込みが少なく、火床は円形を呈する。カマドは構築材料から石を主体にした石組カマドと石と粘土を組みあわせたカマドの2種類がある。柱穴は第3号住居址と第4号住居址にみられるが規則的ではなく、第1、5、8号住居址では柱穴は全く確認されていない。第3号と第4号住居址の柱穴は口径が小さく、深さも10cm前後で、柱穴の存在しない住居址共に、上屋構造は非常に簡易であったと考えられる。最近、高根町の青木北遺跡より、1辺約6.5mで、各壁下の床直下に径20cm前後の偏平な石が各4個検出され柱を支える礎石ではないかと考えられることから、本遺跡検出の柱穴の存在しない住居址等について、今後、上屋構造と柱穴の再検討が必要であろう。周溝は第2、3、6、7、8号住居址で確認され、第2、3、8号住居址でカマド部分を除いて一巡している。

以上、形態、規模とカマド、柱穴、周溝等の内部施設について見たが、遺構からはカマド以外形態的な相違はなかった。

出土土器について

ここでは、本遺跡より出土した土師器環形土器とそれに3点と出土数は少ないが年代的尺度になる須恵器環形土器を中心分類を加え県内における平安時代土器編年の研究成果を踏まえ編年的位置を考える。

須恵器環形土器

A類（第6号住居址出土）

器壁はほぼ同じ厚さで立ち上がり口縁部でゆるやかに外反する。底部は回転条切り未調整である。口径11.5cm、底径6cm。

B類（第8号住居址出土）

器壁は薄く、ゆるやかに外反する。口縁部は玉縁を呈する。口径12cm。

土師器坏形土器

A類（第6号住居址出土）

体部下半を斜めの範ケズリし、内面に暗文を施す。底部は全面手持範ケズリされ、色調は赤褐色を呈する。本土器はいわゆる甲斐型の坏と呼ばれるものである。

B類（第1号住居址、第2号住居址出土）

底よりゆるやかに外に開くように立ち上がり、口縁部もやや外反気味である。口縁部は玉縁化を呈する。体部下半を斜方向の範ケズリし、底部は全面手持範ケズリされる。

C類（第1号住居址、第2号住居址、第8号住居址出土）

底より外に開くように立ち上るのはB類と同様で、口縁部は完全に玉縁化し、B類よりも外反する。内外面共にロクロ整形を施す。

D類（第1号住居址、第2号住居址出土）

内面黒色処理のいわゆる黒色土器で、器壁は薄く、口縁部は外反する。内面は範磨きが施され、底部は回転糸切り未調整である。口径の差が大きい。

E類（第1号住居址出土）

口縁部は、やや内反し、内面の口縁に段をもつ。内外面共にロクロ整形を施し、底部は回転糸切り未調整である。

F類（第1号住居址出土）

器壁は厚く、腰部でくびれて立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部は回転糸切り未調整の坏と全面手持範ケズリの坏がある。

G類（第1号住居址出土）

内面黒色処理の高台をもつ坏である。内面には範磨きが施され、底部は回転糸切り未調。

編年的位置

須恵器坏形土器A類は、八王子市南多摩窯址群の御殿山59号住居址出土の坏形土器に類似し、A類には、甲斐型の坏といわれる土師器坏形土器A類が共伴する。御殿山59号窯址の製品は9世紀第2四半世紀～9世紀第3四半世紀に比定され、土師器坏形土器A類は、坂本氏等の編年では

第VII期に入り、9世紀第4四半世期に考えられている。須恵器壺形土器B類は、A類と同様に南多摩窯址群の御殿山25号窯址出土の壺形土器に類似するものと考えられる。御殿山25号窯址の製品は、9世紀第4四半世期～10世紀第1四半世期にあてられている。土師器壺形土器B類は、坂本氏等の編年で第XI期の10世紀第3四半世期が与えられている。土師器壺形土器C類は、B類のなごりをひくもので、坂本氏等の編年で第XII期で、10世紀第4四半世期にあたる。D類は、信州系の内面黒色処理の土器である。本土器については、山梨県と長野県の編年研究において隔たりがあり、今後検討していくことで、今回は年代に関して留保しておきたい。E類とF類は、坂本氏等の編年でXIII期からXIV期で11世紀前半より11世紀中葉の年代が考えられている。G類はD類と同様に年代的位置は今後の検討が必要である。また、須恵器壺形土器A類、B類と類似する製品が「信濃土器洞窟址」にみられ、須恵器壺形土器A類、B類が長野県からの搬入品の可能性もある。

以上の結果から本遺跡出土の土器の年代は、9世紀後半～11世紀中葉までとかなりの幅の時間が考えられる。なお、十器によって得られた年代と重複関係より住居址の年代は次のようになると思われる。本遺跡の住居址の中で最も古いのは第6号住居址で、9世紀後半～10世紀前半の所産で、続いては、遺物の出土はないが重複関係より、第7号住居址が10世紀前半、そして、第8号住居址が10世紀前半～10世紀中葉と考えられる。第2号住居址は10世紀中葉～10世紀後半の構築と考えられ、第1号住居址は10世紀後半～11世紀中葉に位置づけられると考えられる。

また、第3、第4、第5号住居址等については、10世紀後半～11世紀の年代が想定される。

参 考 文 献

1. 末木 健 1976 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
—北巨摩郡小瀬沢町地内—山梨県教育委員会
2. 末木 健 1975 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
北巨摩郡長坂・明野・並崎地内—山梨県教育委員会
3. 末木 健 1976 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
北巨摩郡須玉町地内—山梨県教育委員会
4. 坂本美夫他 1983 「シンポジウム 奈良・平安時代の諸問題—相模国と周辺地域の様相」 『神奈川考古』 第14号
5. 笹沢 浩 1976 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
—諏訪市その4
6. 遠藤真周、遠藤藤麻呂 「信濃上器洞遺跡」 『下伊那歴史考古学研究所調査報告第二冊』
7. 山梨県考古学協会 1983 「山梨県の遺跡」 山梨日日新聞社

お わ り に

木ノ下・大坪遺跡遺跡の調査報告について、ここに報告書としてまとめる事が出来、多くの成果を得る事が出来た。本報告書がこの地域の平安時代研究の解明の一助になれば幸いである。

最後に発掘調査、報告書を刊行するにあたり、山梨県埋文センター、関係者、諸先輩の御協力、御指導を得る事が出来、厚く感謝申し上げます。

図版



遺跡より
八ヶ岳を望む



遺跡近景
(西より)



遺跡近景
(東より)

遺跡東側

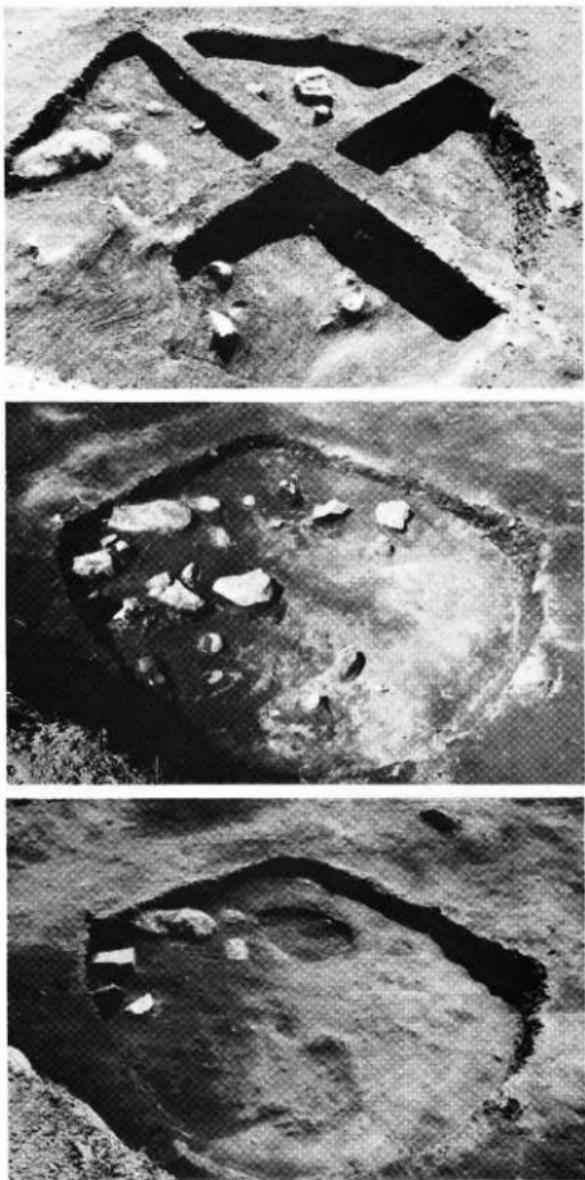


遺跡南側



調查風景





第1号住居址



第1号
住居址カマド



第1号住居址
出土遺物



第1号住居址
出土遺物

图版
5



第2号住居址



第2号住居址

カマド



第3号住居址



第3号住居址

カマド





第4号住居址

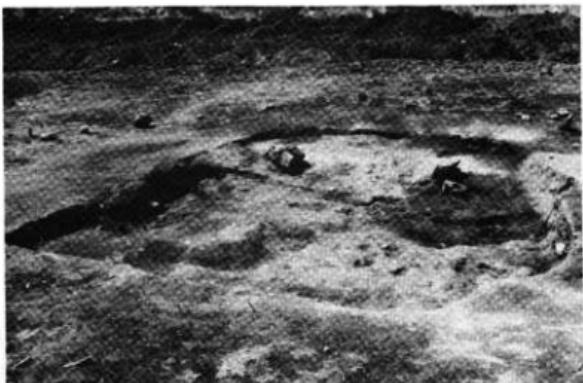


第5号住居址



第5号住居址

第6、7、8号
住居址



第1号
据立柱建物址



第2号
据立柱建物址





第1号溝状遺構



第2号溝状遺構



第3号溝状遺構



第3号溝状遺構

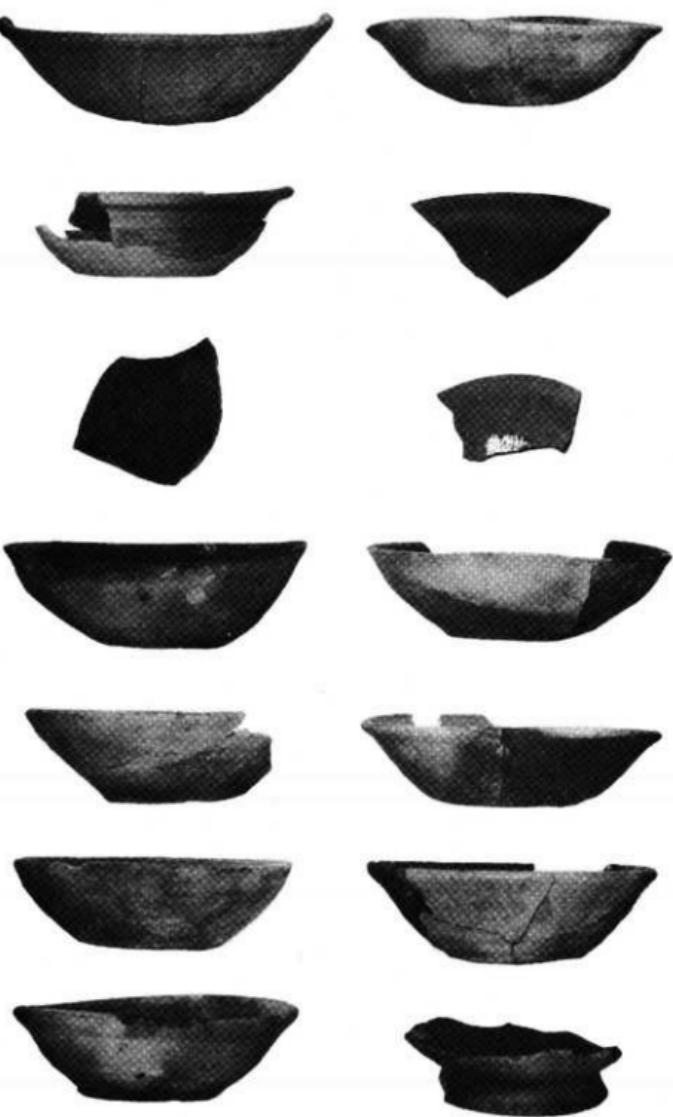


第3号溝状遺構



第3号溝状遺構





第1号住居址出土遺物

图版
14

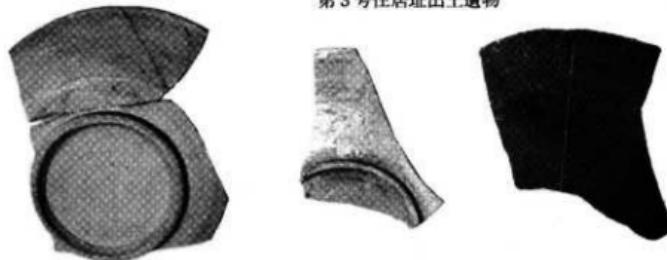


第1号住居址出土遗物



第2号住居址出土遗物

第3号住居址出土遺物



第4号住居址出土遺物



第6号住居址出土遺物



第8号住居址出土遺物

图

版

16



第2号掘立柱建物址出土遗物



第2号土壤出土遗物

昭和58年3月25日 印刷
昭和58年3月25日 発行
大泉村木ノ下・大坪遺跡
発掘調査報告書
発行所 光洋電子工業株式会社
大泉村教育委員会
印刷所 桃北印刷株式会社

